

明治天皇詔勅謹解より

一〇三 教育に關する勅語

八六八

金鵄勳章は「敍賜條令」に依つて、功級は武功の外、階級に依つて差があることにされたため、如何に拔群の武功を立てても尉官の初級は功五級に止り、將官の初級功三級に及ばないことになつてゐる。この點が問題とされて、ドイツの鐵十字章のやうに、功級を附けない方が良いといふ説が出されたが、實現されなかつた。

(平田)

一〇三 教育に關する勅語

明治二十三年十月三十日

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳拳服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名 御璽

(東京大學藏・原本)

朕惟ふに、我が皇祖皇宗國を肇むること宏遠に、德を樹つること深厚なり。我が臣民、克く忠に克く孝に、億兆心を一にして、世世厥の美を濟せるは、此れ我が國體の精華にして、教育の淵源亦實に此に存す。爾臣民、父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じ、恭儉己れを持し、博愛衆に及ぼし、學を修め業を習ひ、以て智能を啓發し德器を成就し、進で公益を廣め世務を開き、常に國憲を重じ國法に遵ひ、一旦緩急あれば義勇公に奉じ、以て天壤無窮の皇運を扶翼すべし。是の如きは、獨り朕が忠良の臣民たるのみならず、又以て爾祖先の遺風を顯彰するに足らん。斯の道は、實に我が皇祖皇宗の遺訓にして、子孫臣民の俱に遵守すべき所、之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して悖らず、朕、爾臣民と俱に拳拳服膺して、咸其德を一にせんことを庶幾ふ。

明治二十三年十月三十日
御名 御璽

○皇祖皇宗 皇室の御先祖。天照大神始め祖先の神々と神武天皇以下歷代の天皇。なほ杉浦重剛『倫理御進講草案』には「我が皇祖皇宗」の「我が」を複數とし、「我が」とは複數にして、天皇御自身儼然として宣ふ朕の單數なるに反して、溫情溢るる御心より我等がと宣ふ。されば文部省の英譯勅語にも Our と複數に譯す」と述べてある。○國を肇むること宏遠に 日本の

明治二十三年十月

國を、遙か大昔に遠大な理想を以つて御開きになり。肇は始と同じ。肇國の語は『書經・酒誥』に、また『日本書紀』崇神天皇紀に「御肇國天皇」と出づ。宏は、廣または大の意。宏遠は、ひろく遠いこと。時間的、空間的に悠遠廣大であるだけでなく、理想、精神の遠大なことを含めていふものと解せられる。○徳を樹つること深厚なり 徳の原義は得、身に著けた美德、道義をいひ、また恩恵、名望などの意味がある。古語では「うつくしび」と訓んだ。ここにいふ徳は、美德、道義を指すものと思はれるが、恩恵、めぐみの意味をも兼ねるものと解せられる。すなはち、うるはしい道徳を確立されると共に、政治、教育、文化等に於けるめぐみを、非常に深く植ゑ付けられたといふこと。「樹つ」は、樹立する、深く植ゑ付けること。○克く忠に克く孝に「克く」は「能く」と同じで、強く、また重々しく言ふ時に用ゐられる。忠の字は中心と書き、まごころの意。轉じて誠心を以つて君國に盡すことを忠といふ。孝の原義は養、すなはち親を扶養すること。轉じて、誠心を以つて父母に盡すことを孝といふ。○億兆 すべての國民。數の名稱から轉じて、非常に多い民をいふ。○世世厥の美を濟せるは 代々忠孝の美風を全うしたのは。「厥の」は「其の」と同じ。「濟す」は「成す」と同じで、完成する、成就するの意。○國體 國柄。その國の本質と、それから發した歴史的な種々の特色とを綜合したものの意味に用ゐられる。○精華 最も美しい特色。精は、混りもののない純粹なものを意味し、華は、花、若しくは美、光を意味する語である。○淵源 みなもと。事物の起る根元。○爾臣民 爾は汝と同じ。軽く呼ぶ時に用ゐられる語。すべての國民に向つて親しく御呼びかけになられた御言葉。○友に友愛を以つて交はること。仲好くすること。○朋友相信じ 友人が互に偽らず欺かず誠の心で交はること。○恭儉己れを持し つゝしみ深くおごり高ぶることなく、放縱に流れず、つゝましかに自分の身を保つこと。恭は、うや／＼しく謙遜であること、儉は、欲望を節制し放埒にならないこと。○智能を啓發し 知識才能をひろくこと。啓發は、ひらいて導くこと。○論語・述而に「不憤不啓、不悱不發」とあるのに本づく語。○德器を成就し 立派な人格に自分をつくり上げること。德器は立派な人格、または人格と才能の意に用ゐられる。成就は、仕上げる、作り上げる意。○公益 公衆の利益。○國憲 國の政治の本になるおきて。憲法。○一旦緩急あれば 一度び國家に一大事が起つた場合には。緩急は、危急。戦争な

どの差迫つた變事。緩は、ゆるやかといふ意味であるが、その意味を含まずに急の字に添へたもの。○義勇公に奉じ 正義に基く勇氣を振ひ起して、國家公共のために盡力するといふこと。奉公の語は『春秋左氏傳・定公・十三年』「史記・廉頗藺相如列傳」等に見える。○天壤無窮の皇運 皇國の天地と共に窮りなく榮え行く創造進化。『日本書紀』神代紀に、天照大神が皇孫に勅して「寶祚の隆えまさむこと、當に天壤と窮り無けむ」とのたまはれたとあることに本づく。運は運命の運ではなく、易の流行轉運、すなはち創造進化の意味に解せられる。○扶翼 たすけること。扶も翼もたすけるといふ意。○是の如きは「爾臣民父母に孝に」以下「天壤無窮の皇運を扶翼すべし」までを受ける。○遺風 祖先がのこしておかれた美風。○顯彰するに足らん 十分に明かにあらはすことになるであらう。○遺訓 遺された教訓。○遵守 したがひまもる。○之を古今に通じて謬らず これを昔から今に至るまで、何時の時代に實行しても間違つてゐないといふこと。○中外に施して悖らず 國內で實行しても、國外で實行しても違はないといふこと。「悖る」は、そむく、反する、たがふ。○拳拳服膺して 謹んでさくげ持つやうに、片時もその身を離さずに、よく守ること。『中庸』に「得一善、則拳拳服膺而弗失之矣」とある。拳々は、捧持するさま。服膺は、胸に著けること、すなはちよく守ることをいふ。○戚其德を一にせんことを庶幾ふ 君臣一體となつてその徳を完全なものにすることを切に希望する。君民共々、學徳を磨いて人格を純一にし、同じやうに立派な人になることを深く望むとの意である。『書經・咸有一德』に「咸有一德」とある。

(阿部)

明治十三年十二月の改正教育令、そしてそれに續く十四年五月の小學校教則綱領、六月の小學校教員心得の發布は、當時の文教政策が明治十二年の教學に關する「聖旨」の線に沿つて推進されるやうになつたことを示すものである。明治天皇はその事を嘉納せられ、更に獎勵していらせられた。十五年二月二十一日に文部卿福岡孝弟に傳へられた教育ノ事ハ固ヨリ一時ニ遂クヘキモノニ非ス假令現任文部卿ヲ替ルトモ文部省ニ於テハ此旨趣ヲ一貫シ徹底セシムヘキノ覺悟アルヘシ

といふ御内旨は、その間の事情を物語るものである。

文部省では、それまでの翻譯教科書に代るべきものとして明治十四年西村茂樹の『小學修身訓』を刊行したが、更にそれを改訂し、明治十六年から十七年にかけて『小學修身書初等科之部』六冊及び『小學修身書中等科之部』六冊を出版した。民間に於いても、小學校教則綱領に基く教科書が續々編輯されることになった。だが、開明派の思想家の間では、この教育政策の轉換を新時代に即しない封建教學の復活であると批判する聲が強く、また丁度その頃は所謂鹿鳴館時代で極端な西洋追隨の風潮が全國に漲つてゐたために、教育の正常化は中々容易ではなかつた。

當局の努力にも拘らず修身教育が依然として不振であつたことについて、明治十七年二月岡山縣の學事視察に赴いた辻新次は次のやうに報告してゐる。

茲に最も憂ふべきは修身の教授なり。即ち修身書を教ふるは恰も讀本を素讀せしむるが如く、其格言事實を敷衍説話し教員躬行生徒を提撕し眞に之が徳性を感化せしむるが如きに至りては之を見ること罕なり。又修身を授くるは多くは各級受持の教員之に任じ、耆徳者若くは主座教員にして之を負擔する者は殆ど之を見ず。甚しきは年甫めて十年前後の授業生にして之を授くるものあるなり。

教員の質が問題であるといふのである。文部首脳部は直ちにこの意見を取り上げた。そしてこの年の八月十三日、『碩學ニシテ耆徳アリ修身教授ノ任ニ適スル者』には學力檢定をしないで免許狀を授與することが出来るやうにしたのであつた。

しかしながらこの修身教育重視の文教方針は、明治十八年十二月内閣官制が布かれ、第一次伊藤内閣の初代文部大臣として森有禮が就任するに及んで、再び大きく動搖する。森は、一部に言はれてゐるやうな單なる洋癖家ではなく、『國風の教育』すなはち『國體を彰明にし、日本國民の保持すべき品位資質を辨へしめ、自然に忠愛慎重の念を生ぜ

しむべき教育』を目標としたが、明治十三年以來の文教政策には批判的であつた。就任後間もなく學校制度の改革整備に著手した彼は、『小學校、學科及其程度』の中で特に修身教育について、

内外古今ノ人士ノ善良ノ言行ニ就キ兒童ニ適切ニシテ且理會シ易キ簡易ナル事柄ヲ談話シ日常ノ作法ヲ教ヘ教員自ラ言行ノ模範トナリ兒童ヲシテ善ク之ニ習ハシムルヲ以テ專要トス

と規定した。そして明治二十年五月には、修身教科書の使用禁止の通達を出したのであつた。この時、從來の修身教科書に對して、「兒童の發達の度合如何を辨へず、徒に古人言行の漠然としてむつかしきことを授くるは甚だ不可なることは勿論、中には穿ち過ぎたることありて小學生徒の腦力には逆も解し得べからざることあり」と極付けた森文相の立場には、「今の世に孔孟の教を唱ふるは迂闊なり」といふ豫てからの考へが流れてゐたのである。それは正に東洋道德に依る修身教育を推進してゐた人々に對する挑戦であつた。

日時ははつきりしないが、文相の持論を傳聞した元田永孚は、宮中で森と會つた機會に德育振興についての所信を披瀝し、その見解を質してゐる。元田は、その際「漢學者が我が國の開明進歩の障礙になつてゐる」といふ森の批判を取り上げ、自己の立場を次のやうに明言した。

孔子ノ教ハ吾國ニアリテハ吾君ヲ愛シ吾父ノ子トナリテハ吾父ヲ愛シ孔子ヲ愛セサルヲ以テ吾道ト心得ルヲ以テ日本ノ今日ニアリテハ忠孝ノ大道ヲ其時世々々ニ活用スルヲ以テ僕ノ學問トスルナレハ當世ノ支那好キ文章家考證學ノ奴隸ニアラサルナリ唯日本ハ日本ノ道ヲ立テ日本ノ教育ヲ行ハント熱心ニ堪ヘサルナリ

そして忠君愛國の德義涵養の必要性を力説したのである。これに對して森は、「國家の富強は忠君愛國の精神旺盛するより來る」として、元田の狙ひは國家的要請に合致することを認めたが、その方策については、これまでのやうに儒教の徳目を言葉や文字で注入することに反對し、寧ろ體育の振興特に兵式體操に依る心身の鍛鍊を主張して譲らず、

遂に兩者の合意は得られなかつたのであつた。

森文相の登場に依つて、突如として行はれたこの修身教育指導方針の變更が、教育界に波紋を捲起したのは當然であらう。それだけでなく明治十四、五年頃から顯著になつた我が國固有の道に依る德育振興政策に對しては、開明派側からの反對が熾つてをり、例へば福澤諭吉の「德育如何」(明治十五年十一月)、^(明治十五年十一月)「德育餘論」(同)、^(同)「儒教主義の成跡甚だ恐るべし」(明治十六年四月)、^(明治十六年四月)等の論文が既に發表されてゐたが、これを契機に多くの相對立する德育論が提唱され、所謂德育混亂時代を現出した。中でも最も教育論壇を賑したのは、加藤弘之の『德育方法案』であつた。これは明治二十年大日本教育會に於ける加藤の講演を出版したものであり、當時の小中學校に於ける德育の不統一を救ふためには、歐米諸國の學校德育が宗教に基礎を置いてゐるのを範とし、神道、佛教、耶穌教、儒教に基く修身科を各校に設け、各宗派の布教師を任用し、生徒は各自その信ずる所の教派に就かせるといふ要旨であつた。この宗教に依る德育論と竝んで、新しい考へに依る德育主義を代表するものとして話題となつたものに杉浦重剛の『日本教育原論』(明治二十二年十月刊)がある。それは、

今日我日本ニ於テハ德育ノ點ニ於テ其基礎ヲ定ムルニ付キ頗ル困難ナル事情ナキニアラズ西洋諸國ノ如キニ到リテハ宗教ノ力ヲ借リテ道德ヲ維持セントスルノ風流行シ支那ニ於テハ尙ホ鄒魯ノ餘響ニ依ルト雖モ我國ノ如キニ到リテハ其中間ニ立チ殆ンド其判別ニ苦ムガ如キ有様ナリトス(略)余ハ我國ノ如ク宗教ヲ以テ道德ノ大本ヲ定ムルコト頗ル難カルベキノ國ニ於テハ物理ヲ推シテ人事ニ應用スルヲ以テ好手段トナスモノナリ

と説き、理學の原則を取り入れる德育論を強調したものであつた。

加藤や杉浦等の提案は、森文政の修身指導方針改定を一應支持する立場の議論であるが、一方飽くまで徳教の基礎を歴史と傳統に求め、我が國の特質を明かにすることに依つて混亂した德育論に歸著する所を與へようとする主張が

強力に展開された。その代表として内藤耻叟の『國體發揮』(明治二十二年十月刊)と西村茂樹の『日本道德論』(明治二十二年十月刊)を擧げておかう。内藤は、夙く明治十五年『幼學綱要』が頒賜された時、その精神を弘く流傳し、人心を一新するために宮内省に一つの學校の設立を上奏してゐたが、この『國體發揮』に於いても我が國體の特色を説き、「國教の基礎を皇室に置く、漢土西洋の教はこれを採用して天祖の遺訓を助成する」との立場を取つてゐた。西村の『日本道德論』は、明治十九年十二月東京一ツ橋の大學の講堂に於いて公衆を對象とした三日間に亘る演説を印刷に附したものであつた。彼はその中で、「我が國の急務は國民が力を合はせて獨立を全くすることであるが、そのためには道義の昂揚を圖るところこそ最も大切である。然るに明治初年以來の我が國では、人倫も宗教も衰へ、道德の基準を見失つてしまつてゐる。道德の教は世教と世外教に分けられるが、日本の道德としては世教を以つてその體系を作るべきで、速かに我が國の傳統に基き、支那の儒學と西洋の哲學とを參考にして國民道德の基礎を確立し、それに依つて國民の品性を形成すべきである。國家の發展は、制度に在らず、軍備に在らず、正に國民の品性の向上に在る」と述べ、特に強調すべき徳目として、一に勤勉、二に節儉、三に剛毅、四に忍耐、五に信義、六に進取、七に愛國心、八に天皇奉戴を擧げたのであつた。西村は、このやうな立場に立つて明治二十年修身書勅撰の議を提出、森文相の反對に因つてそれは沙汰止みとなつたが、二十二年二月には宮内省に明倫院の建設を建白、皇室に依る道德教育の統轄を主張して已まなかつたのである。

文部省では、明治二十一年森文相の意見に基き、能勢榮等を委員として中學校師範學校教科書として「倫理書」を編修出版したが、この頃になると一般思想界に於いても、歐化思想に對立する思想運動が漸く勃興してゐた。殊に明治二十年代になつて結成された明治會、國教大道社、政教社等の思想團體は、何れも日本主義を唱へて國民教化の問題に言及し、正しい教育理念の確立を要請してゐたのであつた。

教育勅語が成立するやうになつた直接の機縁は、明治二十三年二月の地方長官會議に於ける「德育涵養ノ議ニ付イテノ建議」であつた。當時の地方長官の間に教育問題が取り上げられるやうになつた経緯について、石井省一郎は次のやうに回想してゐる。

私は明治十七年二月、内務省土木局長から、岩手縣令に任ぜられた、赴任後管内を巡視し師範學校中學校小學校と悉く巡視したが、教育の主義が何處にあるかと考へると、どうも一般の風潮が變である。例へば、我が日本では、昔から兒童は、勇者といへば鎮西八郎とか、源義經とかいふ人物を語り、智者忠臣といへば、楠新田を語るといふのが普通であつた、然るにかやうな風は殆んど無くなつて、歐羅巴や亞米利加の豪傑を理想とするといふ風潮であつた、どうも日本を顧みないといふやうな風であつた、學校の教員なども日本人は極めて劣等な國民である、歐米人には到底及ばぬから、日本の歴史、習慣、その他、何もかもなくして、只管歐米に化してしまひたい、又さうしなければ駄目であるといふ様な考へであつた、私はこれを見、これを聞いて、實に困つたものだとかへた、(略)そこで文部省の方針を探つて見ると、米國歸りの學士が跋扈して、何から何まで彼等の意嚮によつて定まる、文部大臣は彼等の傀儡の如しといふさまである、云々

文教問題を憂へてゐたのは石井だけではなかつた。その一例に、京都府知事北垣國道が森文政下の修身教育を憂慮し、明治二十年五月十八日付元田永孚宛書翰の中に、次のやうな不満を漏らしてゐる。

方今小學教育ノ法タル六歲就學八年ニシテ尋常高等兩科ヲ卒フ其間修ムル者修身、讀書、作文、習字、算術、地理、歴史、理科、圖畫、輕體操、隊列運動、唱歌、裁縫、英語、農工商初科等日用ノ業務備ハラサル所無シ然レトモ其修身ノ科ニ於テハ其授業法尋常科十五分時間高等科三十分時間簡易ナル嘉言善行ヲ講話スルニ止ルノミ是レ畢竟外形ノ教ニ屬スルノミ而シテ其精神ノ根元ヲ成立スルノ教ハ措テ之ヲ問ハサルモノ、如シ(略)今德育ノ

備ハラサルコト如此亦一大缺典ナラスヤ

明治二十一年頃には既に同憂の知事の間に聯絡が著き、その動きも活潑になつたが、二十二年森文相暗殺事件以後になると、千葉の船越備のやうに直接榎本文相と談判する知事も現れてゐたのであつた。二十三年の建議はこれら有志知事の奔走が實を結んだものである。建議文は、先づ冒頭に「普通教育ノ主要ハ主トシテ國民タルノ徳性ヲ涵養シ普通ノ知識藝術ヲ修メシムルニ在リ」と述べ、次いで當時の學校教育に對して「然ルニ現行ノ學制ニ依レバ知育ヲ主トシテ専ラ藝術知識ノミヲ進ムルコトヲ勉メ德育ノ一點ニ於テハ全ク缺クル所アルガ如シ」と批判し、そのために小學生はその父兄を輕蔑し、中學生になると自ら校則を犯しながら教職員の處置が不當であると言つて騒動を起す者も出てゐる、これでは社會の秩序を紊し、聽て國家を危くすることになる、政府は今にして對策を樹立しないと必ず後悔するであらう、と結んだものであつた。

この建議が上程された二月二十日の會議では、石井岩手縣知事が賛成意見を述べ、次いで松平宮城縣知事、籠手田島根縣知事が交へ起つて明治五年以來の文教政策の反省を求めた。また、東京府の高崎知事からも「政府の文教政策は主觀的な意圖は免も角結果から見れば幼年者を獎勵して虛無黨を養成しゐるやうなものだ」との發言があつた。二十一日も引續き活潑な議論が展開された。鍋島佐賀縣知事、櫻井德島縣知事の賛成意見に續いて、柴原香川縣知事は、「この建議書だけでは不十分だ。更に總理大臣、文部大臣に直接面會して實施を迫る必要が有る」と強硬な態度を示した。また安場福岡縣知事から、「このやうに德育を輕んじ、知識才藝を偏重するのは、大學の教育方針が本源であるから、其處から改めねばならない。同時に學習院も改革する必要がある。そしてそれを標準に師範教育を改革し、立派な教師を得るやうにすべきである。そのために宮内大臣にも面會、大英斷を以つて教育改善に當るやう進言すべきだ」との希望意見も述べられた。ところが、富岡熊本縣知事が更に一步進めて、

尋常ノ手段ヲ以テ挽回ハ到底望ムベカラズ故ニ陛下直接御親裁ヲ望ム所ナリ
と主張したため、會場では「德育と天皇御親裁」の問題に議論が集中することになった。その結果、先づ政府に強硬
申入れすることに決定、安場、松平、柴原、籠手田、そして小松原埤玉縣知事がその委員に指名された。その後二
十四日、二十五日の會議でもこの問題は取り上げられ、結局知事會全員が文相に面會すること、建議書は首相と内相
にも提出することを滿場一致で可決した。

二月二十六日來省した知事團に對して榎本文相は、德育振興の重要性については同感の意を表し、文部省でも修身
を「口授」だけでなく、人倫五常を本とする修身教科書編輯の方針を立ててゐる旨を回答したが、それでは收らず、
問題は閣議の重要審議事項となつた。山縣首相の「談話筆記」にはその事について次のやうに記されてゐる。

明治二十三年ノコト、記憶ス地方官中ニ教育ノ目的ヲ一定スル必要アリトノ要求オコレリ内閣ノ中ニモ同様ノ意
見ヲ懷クモノアリシガ如何ニスベキカノ案ナシ當時ハ頗ル多忙ノ時期ニテ勅令亂發ストモ言フベキ際ナリ(略)
余ハ軍人勅諭ノコトガ頭ニアル故ニ教育ニモ同様ノモノヲ得ンコトヲ望メリ時ノ法制局長官井上毅ナドモ同論ナ
リシガ此時ハ未ダ教育勅語マデニ熟セル考ヘハナク唯互ニ論議シテ十二時頃ニモ至ル有様ナリ云々
その頃は天皇が閣議に出御せられる例が既に開かれてゐた。中々結論が出ないので、山縣は遂にこの問題を天皇親臨
の閣議に諮ることにした。そしてその席上、各大臣から意見の陳述があり、

人生ノ教育尤モ幼童ヲ急ニス宜シク一部ノ箴言ヲ編シテ之レヲ幼童ニ授ケ夙夜誦讀シテ其ノ心ニ記セシムヘシ
との議決を見たのであつた。豫て教育の大本を樹てゐる事に大御心を傾けて來られた天皇は、直ちに榎本文相に對して
箴言の編纂を求め給うた。この箴言編纂の勅命が、直接教育勅語の起草に繋ることになったのである。

勅命を拜した榎本文相は、山縣首相と協議、學者を集めて箴言起草を依頼する方針を立てた。だが、まだ著手しな

いま、明治二十三年五月二十二日内閣改造に因つて芳川顯正と交替することになった。親任式に際して、特に「徳教
の事に十分力を盡せ」との異例の御沙汰を拜した新文相芳川は、侍立した首相と共に、「天皇が平生如何許り教育上
に軫念遊ばされしかを恐察し奉り」、全力を盡して詔命に奉答することを誓つた。そして直ちに德育の基本となる文
書の作成に著手した。芳川家に残る文書や文部省の記録等に據れば、曾て帝國大學文科大學教授を勤め、當時元老院
議員であり名文家と目せられてゐた中村正直がその起草者として選ばれた。そして中村の立案を本に文部省内で慎重
に修文、六月中旬になつて成案が出来、山縣首相の手許に提出された。だが、この文部省案は、法制局に回附される
に及んで、多くの問題點が指摘された。そして、茲に山縣の決斷に依つて法制局長官井上毅が勅語の起草者として登
場することになったのである。

その間の経緯を明かにするものとして、六月二十日付山縣宛井上書翰の全文を引用しておかう。

被仰付候教育主義之件ニ付遲延之罪恐縮ニ奉存候實ニ此事ニ付而者非常の困難を感じ候て兩三日來苦心仕候
其故ハ

第一此勅語ハ他之普通之政事上の勅語と同様一例なるべからず天生ニ聰明、爲_ニ之君_一、爲_ニ之師_一とは支那之舊説な
れども今日之立憲政體之主義に従へば君主ハ臣民之良心之自由ニ干渉せず 英國露國ニテハ宗旨上國教主義を
存し君主自ら教主を兼ねるハ格別 今勅諭を發し
て教育之方嚮を示さるゝは政事上之命令と區別して社會上之君主の著作公告として看ざるべからず

陸軍に於ける軍事教育の一種の軍令たると同じからず

第二此勅語ニハ敬_ニ天_一尊_ニ神_一等之語を避けざるべからず何となれハ此等の語ハ忽ち宗旨上之爭端を引起すの種子と
なるべし

第三此勅語ニハ幽遠深微なる哲學上の理論を避けざるべからず何となれハ哲學上の理論ハ必反對之思想を引起す

べし道之本源論は唯々専門の哲學者の穿鑿ニ任スベシ決して君主の命令ニ依りて定まるべき者ニ非ズ
 第四此勅語ニハ政治上之臭味を避ケざるべからず何トナレバ時の政事家之勸告ニ出^{いで}て
 至尊之本意ニ出^{いで}ズとの嫌疑を來すべし

第五漢學の口吻と洋風の氣習とを吐露すべからず

第六消極的の砭^ひ愚戒^い惡之語を用ウべからず君主の訓戒ハ汪々として大海の水の如くなるべく、淺薄曲悉なるべからず

第七世にあらゆる各派の宗旨の一を喜はしめて他を怒らしむるの語氣あるべからず

此數多の困難を避けて眞成なる王言の體を全クスルハ實に十二樓臺を架スルより難事ニ可有之候歟

文部の立案ハ其ノ體を得ず如是勅語ハムシロ宗教又ハ哲學上の大知識の教義ニ類し君主の口ニ出づべきものニ非ス世人亦其の眞ニ

至尊の聖旨ニ出^{いで}たる事を信して感激スル者少かるべし
 生の考案ニテハ兩ツの方法あり

甲 ハ文部大臣まで下附セラレ世ニ公布せず

乙 ハ演説の體裁とし文部省ニ下附サレズシテ 學習院か又ハ教育會へ臨御之序ニ下附セラ^レル(政事命令ト區別ス)

別紙ハ右乙の積ニテ試草仕候餘り簡單ニ過ぎ候歟なれとも王言如玉ハ只タ簡短に在りと奉存候

猶高教を奉仰候て更ニ再稿可仕候 頓首

六月廿日

發

睦仁



明治二十三年十月三十日

朕惟^レニ我^レカ皇祖皇宗國ヲ肇^ルコト
 宏遠ニ德ヲ樹^ツルコト深厚ナリ我^レカ臣
 民克^ク忠ニ克^ク孝ニ德兆^ビラニニシテ
 世世厥^ノ美ヲ濟^セルハ此^レ我^レカ國體ノ
 精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此^ニ存^ス
 爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和
 シ朋友相信ニ恭儉己^レテヲ持^テ博愛衆ニ
 及^ホシ學ヲ修^メ業ヲ習^ヒ以^テ智能ヲ啓
 發^シ德器ヲ成就^シ進^メ公益ヲ廣^メ世務
 ラ開^キ常ニ國憲ヲ重^シ國法ニ遵^ヒ一旦
 緩急^{アレ}ハ義勇公ニ奉^シ以^テ天壤無窮
 ノ皇運ヲ扶翼^スヘシ是^ノ如^キハ獨^リ朕
 カ忠良ノ臣民タル^ノミナラス又^ニ爾
 祖先^ノ遺風ヲ顯彰^スルニ足^ラシ
 斯^ノ道ハ實ニ我^レカ皇祖皇宗ノ遺訓ニ
 テ子孫臣民俱ニ遵守^スヘキ所之ヲ古
 今ニ通^シテ謬^ラス之ヲ中外ニ施^シテ特
 德^ヲ一ニセシコト^ヲ庶幾^フ
 朕^ニ一ニセシコト^ヲ庶幾^フ

山縣伯閣下

この書翰の初めに「被仰付候教育主義之件ニ付云々」とあるのは、既に六月二十日以前に山縣、井上兩者の間で文部省立案の勅語案について會談が行はれ、その結果首相から井上に對して起草するやう指示があつたことを物語るものである。それに續く「第一」の條では、勅語案の法制上の性格について、「他の普通の政事上の勅語と同様であつてはならない」ことを強調し、「第二」から「第七」までは、文部省案の問題點を鋭く指摘しながら草案の内容、表現について、宗旨上の爭端にならないやうにすること、哲學上の理論に走らないこと、政治的臭味を出さないこと、漢學者の口吻や洋學者臭を出さないこと、消極的な訓戒とならぬこと、特定の宗派に偏しないこと等々特に考慮すべき諸點を掲げたものであり、末尾の「生の考案ニてハ」以下は勅語公布の手續、體裁についての配慮である。井上はこの書翰と同時に自ら試稿した別紙勅語案文を届けてゐるが、事の重大さに恐懼した彼は、なほ「再應熟考」して、五日後重ねて山縣に書翰を送つた。それは前掲六月二十日付の書翰で述べた所を整理補訂した上で、爲政者の取るべきその態度に言及し、

今日風教之敗レハ世變之然らしむると上流社會之習弊ニ因由ス矯正之道ハ只タ政事家之率先ニ在る而已決して空言ニ在らざるべし空言の極至尊の勅語を以て最終手段とするに至りてハ天下後世必多議を容るゝ者あらんと直言、政治の要路に立つ人々の猛省を促したものである。山縣に提出された井上案初稿はこのやうに慎重且つ周到な配慮の下に執筆されたのであつた。この草案の登場に由つて文部省案は實質上廢案となり、その後井上案を本に修文作業が續けられ、教育勅語の正文にまで練り上げられるのであるが、試草に際しての井上の姿勢と構想は、基本的には最後まで變改されることはなかつた。

芳川家に残る法制局用紙に認められた勅語草案は明かに井上の自筆であつて、問題の初稿と推定されてゐる。恐ら

く山縣首相から芳川文相に回附されたものであらう。敢へて起草の大任を引受けた井上は、山縣の注意もあつて六月二十八日元田永孚を訪ね、初稿に若干補訂を加へたものを送り、その意見を求めた。逸早く勅語起草の開始を聞知した元田は、自らもまたその構想を練り、既に六月十七日には「教育大旨」といふ一文を草してゐた。しかし彼は自案に拘泥せず、六月二十九日付で井上宛てに書翰を送り、「如貴論飽迄意必之辯を去り天下萬世ニ互り國家之爲を考度」と述べて、全面的協力を快諾した。そして六月三十日に井上案に朱筆を加へて返送してゐる。草案の修文は、斯くて文部官僚の手を離れ、法制局長官井上毅と樞密院顧問官元田永孚の作業に移つたのであつた。

兩者に依つて慎重に推敲修正された草案が山縣に届けられたのは、七月二十三日であつた。山縣は芳川と共に熟讀検討の後、内覽の手續を取つたが、その際、奉呈されたのは甲、乙の二案になつてゐる。甲案は謹書された井上案であり、乙案は中村起案を本にした文部省案である。尤も乙案については、芳川文書中のそれと同文の草案に芳川の自筆で「此案廢棄單ニ御參考ニ供ス」と書き込んであるから、山縣、芳川の間では既に「廢案」とすることが決定してゐたと見られる。

教育上の基礎となるべき箴言編纂の御下命より爰に二箇月餘、漸くにして「教育ニ關スル勅諭」の草案を御手にせられた天皇は、非常に御喜びになり親しく御検討になられたが、必ずしも全面的には上奏案に御満足でなく、侍講元田に對し、不備の箇所を御指摘になり、その修正を命ぜられたのである。聖意に恐懼した元田は、老軀を挺して至難の作業に當ることを決意、改めて井上の協力を求めることになった。八月二十六日付井上宛元田書翰は、その間の事情を示してゐる。

拜啓爾來御疎遠ニ經過愈御清榮奉欣賀候然者先頃御内示之教育勅諭文近日上奏ニ相成候由ニテ老拙儀へ御下問被爲在段々思召被爲在候而熟考申上候様御内命ヲ蒙リ候故不得止御受申上候然處右者過日モ御内話申候如ク實ニ重

要之 勅諭ニ而誰か草案致し候而も批難無之様ニ者至リ兼可申貴兄ニモ御辭退之由 御沙汰ニ而拜承致シ實ニ御尤ニ奉存候併もはや是迄ニ相成候上者出來候丈ケ精神ヲ盡し申度既ニ老拙へ被仰付候上者愚昧ナカラ考案ヲ運ラシ則別紙原稿ニ意見ヲ加へ修正致シ候間一應御内見へ入申候貴兄御立案者御斷ニ候得共何卒老拙之爲メニ御助力被下別紙修正案御一見無御遠慮御刪正被下度相願申候幸ニ首尾之文者貴兄之御初稿を存し有之候老拙も素より御同案ニ而間然無之候處中間修身之條目を掲ケ候最緊要之處 聖慮ニ叶ヒ不申則旨ヲ奉シテ改正致し候へ共文意適當もいかゝと恐怖仕候申候迄も無之此度之 勅諭者則末文之通ニ萬古不易之道を御親諭被遊候事故當世之風潮ニ者決し而御顧念無之被仰出可然と相考へ候ニ付老拙ニも百世を待而不疑之存意ニ而立案致し置候其御含を以御覽被下御加筆相願申候右内密得貴意度草々不悉

八月廿六日

東野拜

井上盟兄

尙々當時猶酒勾松濤園ニ滞在養老仕候先日安場より御内話之趣も傳承仕御厚意之段拜謝仕候世上之事謹慎可仕と存候本文之一條も辭遜可仕候得共親く 聖意を伺ひ奉り特ニ斯道之爲メ何分難默止御受申上老拙を不顧次第何分御了察被下候而御加筆被下度候也再拜

この書翰と同時に元田から井上に届けられた「別紙修正案」は、前文及び後文の處は需に上奏された草案と大差は無く、聖慮に叶はなかつた中間の徳目の部分が詳細に書き改められたものであつた。井上は折返し返翰を認めてゐる。

教育勅語案ニ付縷々懇示之趣奉敬領候如貴諭實ニ百世之世道人心ニ關係する重大之一事ニ候へハ精又精を加へ金石鼎彝之文となり然後御發行相成度竊ニ冀望奉存候就而者高示之旨ニ從ひ憚らず愚見申述候間可然御取捨被成下度奉願候此様之文字ハ可成典故ありて莊重溫雅ニ重複ヲ避ケ又文人風ノ纖巧手段ノ嫌ヲ避ケ候方可然歟ニ奉存候

明治二十三年十月

八八三

猶大人閣下之公平慎重之結果として此案之金聲玉成之功ヲ全クシ萬世ニ傳へて愧ぢざる之 聖諭タラン事懇祈之至ニ堪へず候生ハ何時たりとも奔走之勞を厭はず候間御旅寓へ參向可仕御一筆御申遣可被下候又何ケ度も御下問を受候事本意無此上奉存候頓首

八月廿八日

毅

元田先生

すなはち、井上は、元田の懇篤な依頼を受けて、既に内閣に申し出で叡聞にまで達してゐた起草關與に對する辭意を酬し、積極的に協力を誓つたのである。當時七十三歳の元田は保養のため酒匂の松濤園に滞在して居り、井上もまた健康を害して轉地することが多かつたが、この後兩者は病床旅寓に在つても苦心精勵、頻繁に修正意見を交換することになつたのであつた。

芳川文書中の宮内省用紙に書かれた元田自筆の草案は、兩者の修正作業が一應終つた九月中旬のものと推定される。其處では、嚮に天皇から元田に渡された草案を一行置きに清書し、行間に修正の文字を記入してある許りではなく、上欄にその訂正理由が朱筆で注記されてゐる。この淨書修正文の特殊の形式からして、原文修正の内命を受けてゐた元田は、恐らくこれと同文のものを謹書して天皇の内覽に供したものと推察されるのである。

尤も、この修正文がそのまゝ最終の勅語案となつたのではない。文部省では、それを複寫版に依つて印刷、慎重に検討して若干の改訂を行ひ、淨書の上で、天皇の御内閣を仰いだ。元田と井上の修正の段階では、この度の勅語は「道德ノ教育を訓誥セラル」るものであるから「國憲國法ヲ重スルハ別ニ揭示ニ及バズ」として削除されてゐたあの「常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ」の條が、天皇の御裁斷に依つて再び加へられたのはその間の事であつたといはれてゐる。内閣に對して芳川文部大臣から「德教ニ關スル勅諭ノ議」についての請議文書が提出されたのは九月二十六日であつた。

あつた。

勅語案の文言及びその發表の方策を繞る内閣の審議は九月下旬から十月中旬に亘つた。それと並行して西村茂樹、川田剛、中村正直、三島毅、島田重禮等の學者に對し個人的な意見も求められた。そして愈々十月二十日、上奏裁可を願ふべき「勅語案」と「發布手續」の閣議決定を見たのである。その勅語案の終りに、「軍人ノ勅諭ト同一ノ體ニテ別ニ文部大臣等ノ副署ナシ」と朱書した貼紙を特に貼附したのは、「もし大臣等の副署がある場合には、同一形式の他の政令と同様に内閣の政略の一つと看做され、後日政界の變動と共に紛更を招く虞がある。それでは聖旨に副ふ所以ではない」といふ井上の起稿當初以來の一貫した主張が、山縣始め閣僚の贊同を得たことを示してゐる。發布手續については、九月二十六日の請議文書に於いて、芳川文相は、高等師範學校臨幸の際か、或いは小學校令發布と同時に發表する、といふ二案を提出してゐたが、閣議の段階では前者が採用され、

高等師範學校へ車駕親臨シ勅語ヲ降シ給フ文部大臣之ヲ奉シ訓令ヲ全國ニ頒布シテ普ク衆庶ニ示スといふことになつた。これらの決定については、翌二十一日山縣首相と芳川文相に依つて詳細に上奏された。

だが、この度の奏請は、必ずしもそのまゝ御嘉納にはならなかつた。「發布手續」については、二十二日宮内大臣を通じて、「文部大臣ヲ宮中ニ被シ召御下賜可ニ相成ニ御臨幸之儀は不レ被レ爲レ好」と仰せ出されたのである。芳川は同日宮内大臣を通じて、また二十四日には山縣と共に參内、師範學校行幸の事を奏請したが遂に御許しが無かつた。斯くて前掲の發布手續は、

明治二十三年十月三十日宮中へ内閣總理大臣文部大臣召サセラレ教育ニ關シ本書ノ勅語御渡シ在ラセラル

但勅語ハ金野紙ニ書シ黒塗御紋付箱軍人勅諭ヲ入ル、面ト同一ノモノ、ニ入ル

と改正されたのであつた。勅語案についても、天皇は二十二日夕刻德大寺侍從長を元田邸に遣はし、元田の意見を御

明治二十三年十月

八八五

求めなられた。十八日以來病で引籠つてゐた元田は、二十四日朝内閣の勅語案が全體として自分の修正文より優れ完全なものになつてゐることを認めた上で、たゞ一點、「原文の中にて之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラサルヘシ此ノ悖ラサルヘシのヘシ之一字弛寛にして堅確ならず」、此處は「悖ラス」と確言すべき旨を奉答した。徳大寺の奏聞を聞き召された天皇は元田の意見を御採擇になり、直ちに總理大臣、文部大臣にその旨御沙汰あり、修正の上で同日御裁可になつたのであつた。

右に述べたやうに、教育勅語立案の過程に於いては、中村正直、井上毅、元田永平等が力を盡して起草に關係し、芳川顯正、山縣有朋が慎重な用意の下にその取纏めに苦心した。これら關係者の輔翼の功績は、確かに大なるものがあつた。だがその間、明治天皇は終始その進捗状況を見守つてをられ、幾度びか修正案文を内閣あらせられて更に補正の内旨を下し、發布手續についても最終的な聖斷を下し給うたのである。

明治二十三年十月三十日、教育勅語は遂に發布された。この日天皇には、總理大臣山縣有朋、文部大臣芳川顯正を宮中に御召しになり、親しく勅語を下し給うたのである。

文部省では翌十月三十一日訓令第八號及び第九號を發し、道府縣直轄學校へその謄本を頒布すると同時に、聖意の奉戴について次のやうに訓示した。

訓示

謹テ惟フニ我カ

天皇陛下深ク臣民ノ教育ニ軫念シタマヒ茲ニ忝ク

勅語ヲ下タシタマフ顯正職ヲ文部ニ奉シ躬重任ヲ荷ヒ日夕省思シテ嚮フ所ヲ愆ランコトヲ恐ル今

勅語ヲ奉承シテ感奮措ク能ハス謹ンテ

勅語ノ謄本ヲ作り普ク之ヲ全國ノ學校ニ頒ツ凡ソ教育ノ職ニ在ル者須ク常ニ

聖意ヲ奉體シテ研磨薰陶ノ務ヲ怠ラサルヘク殊ニ學校ノ式日及其他便宜日時ヲ定メ生徒ヲ會集シテ

勅語ヲ奉讀シ且意ヲ加ヘテ諄諄誨告シ生徒ヲシテ夙夜ニ佩服スル所アラシムヘシ

明治二十三年十月三十一日

文部大臣芳川顯正

この訓令に基き、帝國大學に於いては十一月三日勅語拜讀式を舉行、總長加藤弘之の訓示と文科大學教授重野安繹の「勅語ノ大旨」に關する演説が行はれた。總長の訓示は次の如くである。

吾 天皇陛下ハ夙ニ教育ニ大御心ヲ用ヒサセラレ登祚以來屢 勅諭モアラセラレシカ今般更ニ唯今拜讀セシ所ノ勅語ヲ下シ玉ヘリ本官教官學生等ト共ニ謹テ 聖旨ヲ奉戴シテ將來益々 勉勵從事セサルヘカラス抑今般ノ勅語タルヤ教育社會ノ全般ニ關シテ下シ賜ヒタルハ申ス迄モナキコトナカラ吾帝國大學學生ノ如キハ最高等ノ教育ヲ受クル者タレハ勢ヒ教育社會全般ノ師表模範タルモノト云ハサルヲ得ス果シテ然ラハ其責任ノ至大至重タル亦固ヨリ論ヲ俟タサルナリ本官去月十八日ニ於テ學生生徒ニ對シ學生生徒カ今日ニ於テ德義上最モ心ヲ用フヘキハ禮儀廉恥ノ風ヲ養フト竝ニ吾邦固有ノ性情ヲ務メテ保存シツ、更ニ之カ發達ヲ圖ルコトニ在ル旨趣ヲ訓示セシカ未タ數日ヲ出スシテ圖ラスモ此 勅語ヲ拜讀スルヲ得タルハ本官ニ於テ最モ歡喜ニ堪ヘサル所ナリ汝學生生徒諸子ヨ將來更ニ一層ノ注意ヲ加ヘ謹テ 聖旨ニ副ヒ奉ランコトヲ勉ムヘシ

これと相前後して、全國の各學校に於いても奉戴の式典が舉行されたことは言ふまでもあるまい。

學校許りではない。輿論もまた勅語の渙發を熱狂的に歡迎した。芳川は十一月一日付井上宛ての書翰の中で「今朝之新聞ハ大抵満足ノ意ヲ表セラレ」と述べてゐるが、當時の新聞、雜誌等何れも勅語の公布に對して最大限の讃辭を

呈してゐたのである。十一月一日付東京朝日新聞の社説は、「維新の革命百物を打破し盡して玉石共に碎け教育の大本また共に碎かれて一も依る所なし或は偏に外國の風に則り或は偏に私考の左右に任ず教育は何の爲にするものなりやといふ其主義殆んど之れあることなきなり」と當時の教育界の實態を痛歎した後、「叡聖文武我 天皇陛下には一昨三十日宮中へ内閣總理大臣文部大臣を召させられ親しく教育に關し痛切なる勅語を下し給へり(略)我日本帝國に於ける教育の大本之に存し我國民教育の主義全く此勅語に在り」と述べ、新聞「教育報知」は、特に内藤耻叟の「奉勅の注意」といふ寄稿を掲載し、「皇祖祖宗ノ大道、教育ノ淵源」が明かになつた事を思へば「實ニ涙ノ垂ル、ヲ覺ヘス、感恩戴德、此身ノ處置ヲ忘レテ、手ノ舞足ノ踏ムヲ知ラサルモノアリ」と結ぶ全文を活字化した。また雜誌「教育」は、「謹ミテ 勅語ヲ拜讀ス」と題する一文に於いて、これまでの教育は「殆ント舵ナキ船ノ如シ、龍ヲ描キテ未タ睛ヲ點セサルカ如シ」と言ひ、勅語の下賜に依つて、初めて畫龍點睛の功を全うしたと喜び、

嗚呼 聖言一度降りテ、將ニ枯稿セントスルノ苗、勃然トシテ生色ヲ發セリ、教育社會ガ、穰々タル、收穫ノ倉廩ニ充ツルニ至ルハ、期シテ待ツベキナリ

と論じたのであつた。その他、教育勅語が皆に學校教育の羅針盤にとゞまらず、全日本國民の道德的指針であることを強調したのも少くなかつた。

このやうな勅語渙發直後の情況を確認した關係者の喜びは大きかつた。芳川は十一月一日勿々の間に筆を執り、井上宛てこれを歡迎してゐる省内の情況と校長等の動向を傳へ、井上は二日付元田宛書翰に於いて「感激慶頌無他事存候」と言ひ、元田もまた三日付山縣宛て書を致して、勅語の渙發を翼賛したことは「閣下勳功少カラズ」と雖もその第一の大功であると慶賀した。山縣は直ちに返書を認めその功を元田に譲つたが、山縣自身の述懐が「談話筆記」に次のやうに記されてゐる。

教育勅語ノ未ダ成ラザル前ニハ若シ此ルモノガ出デバ歐洲各國(即チ耶蘇教)ト衝突セントテ其ノ發布ヲ喜バザルモノモアリキ歐風ノ政治家ニハ此ル意見ノ人多數ニテ青木(周藏)ナドモ何ウダラウト考ヘタリ此事ハ余モ大ニ懸念セシガ愈勅語ノ發表アルヤ加藤弘之ヨリ誠ニ結構ナルモノ出デタリトノ書キ物(手紙ニアラズ)ノ來ルニ依リテ初メテ安堵シ人ニモ話セル程ナリキ又長崎邊ヨリモ同様ノ旨趣ノモノ來レリ

世間の反響に對して抱いてゐた當局の懸念が全く杞憂に終り、初めて安堵したといふのである。

文部省ではこのやうな形勢を見て、「大詔一下するや天下靡然として服從し奉り、民心のこれに向ふこと、恰も大旱の雲霓を求むるの概があつた」と判斷した。参内した芳川文相は、「陛下御登極以來屢々重要ノ詔勅ヲ發セ」られたが「此大詔命ノ如ク道德ノ大本立チ教育ノ標準定マリ民心ヲ安カラシメタルハ稀ナリ」と伏奏、天皇には「龍顏いと麗はしく」それを嘉納あらせられたのであつた。斯くて勅語渙發後の文教當局は、その精神をどのやうにして教育の中に徹底し定著させるかの問題に當面することになつたのである。

この課題に對處する方法について、省内では夙くから構想を練つてゐた。既に九月二十六日、芳川文相から内閣に提出した勅語の内容及び發布の方法に關する請議文書の中で、次のやうに述べてゐたのである。

勅諭ヲ發布セラル、ニ於テハ本大臣 聖意ヲ奉體シ務メテ德教ヲ普及擴張セシムルノ方法ヲ設クルヲ任トス故ニ一方ニ於テハ教科書ノ卷首ニ弁スルニ勅諭ヲ以テシ臣民ノ子弟ヲシテ日課ヲ始ムルゴトニ之ヲ拜誦セシメ自然聖意ノ在ル所ヲ腦裏ニ感銘シ以テ德教ニ風化セシメントス又他ノ一方ニ於テハ耆德碩學ノ士ヲ選ヒ勅諭衍義ヲ著述發行セシメ本大臣之ヲ檢定シテ教科書トナシ倫理修身ノ正課ニ充テントス

謄本頒布の際に訓令を發して、教職に在る者は常に聖意を奉體し、式日その他日時を定め生徒を會集して奉讀するやう指示した文部省は、この構想に基き直ちに衍義書の刊行と教科書の是正に著手したのであつた。

勅語の解釋を試みたものとしては、明治二十三年十一月雜誌「國光」に發表された内藤耻叟の論文「勅語童論」が最も早い、同年中に四部の衍義書が版行され、翌年に入ると新たに十八部が出版された。中でも二十四年九月刊行の井上哲次郎著『勅語衍義』は文部省の依頼に依つて執筆されたものであり、その草稿は中村敬宇、西村茂樹等に見られ、彼等の附した意見を芳川文相自ら取捨して版に附したといはれてゐる。すなはち、この書の編輯は、前記文教當局の聖旨奉體事業の一環としての特殊な意義を持つてをり、それだけに世間の關心を聚め、教育界に影響する所も大きかつた。

この官撰とも稱すべき衍義書の印行と並んで、明治二十四年の十一月、文部省では「小學校教則大綱」を公布し、「修身ハ教育ニ關スル勅語ノ旨趣ニ基キ兒童ノ良心ヲ啓培シテ其徳性ヲ涵養シ人道實踐ノ方法ヲ授クルヲ以テ要旨トス」ることを闡明したが、翌十二月には小學校修身教科書檢定標準を作つて修身教科書の是正に乗り出した。斯くて、明治二十五年から二十七年の終りまでに出版された約八十種の教科書は、すべて勅語奉戴の精神に依つて貫かれることになつたのである。

勅語奉戴の徹底を期するこれらの施策は、政府部内の結束の下に推進され、弘く國民的な支持を得た。尤も「海内の民心四分五裂」してゐたといはれる時期の直後であるから、其處に若干の摩擦は避けられなかつた。二十三年十一月三日の名古屋美以教會事件、二十四年一月九日の内村鑑三事件等物議の種となつた出來事があり、また二十四年十一月「教育時論」に掲載された井上哲次郎の「宗教と教育について」といふ一文を繞る論争が展開されたこともあつたが、巨視的に見れば、教育勅語の渙發に依つて、それまで混亂してゐた德育論議に歸一すべき方向が與へられたこと、その後の教育界が内閣の更迭に拘らず一貫して勅語を國民教育の最高の據り處と仰いだ事は、何人もこれを認めるであらう。

教育勅語は明治時代に於ける國民精神の形成に決定的影響を與へた許りでなく、外國に於いても高く評價されるに至つた。この勅語の渙發後、我が國は日清、日露の戰役に國運を賭した。そしてその勝利によつて、それまで殆どその存在すら認められてゐなかつた我が國は世界の注視的となつた。歐米の識者の間でその原因の究明が色々行はれたが、教育勅語に注目する者が多く、「日本人は道義的に極めて優秀である。特にその德育の根本原理が教育勅語に歸一してゐることは他に類例が無い」といふ聲が強くなつた。斯くて明治四十一年ロンドンで開催された國際道德會議に於いて、日本代表に對し「教育勅語の内容についての解説」が要請されたのである。需めに應じて起つた菊池大麓の講演は極めて妥當であり、好評裡に終つた。列國の教育者等は、教育勅語が國民道德運動の一つの成功したモデルであることを認めた。『極東に於ける教育』^(一九〇九年刊)の著者米人スウィング博士は、「教育勅語の根本基調は道德的徳性にとつて價值あるものであつた」と斷言してゐるが、道德史の研究家として有名なフィリップ・マイヤー Meyer, P. 教授もその著『倫理思想史』^(一九三九年刊)の中で、「日本人は偉大な民族が作り出した最も高貴な道德體系の一つの型を發達させてゐる」と書き、武士道について説明した後、教育勅語の全文を掲げ、その特性として普遍性と世俗性の二點を指摘したのであつた。文部省では、このやうな外國人の關心に對應して明治四十年先づ勅語の英譯を公刊したが、その後漢文譯、次いでフランス語譯、ドイツ語譯を行ひ、四十二年に入り『^{漢英}佛獨教育勅語譯纂』を刊行した。

鎖國時代の立後れを取戻すことに懸命の餘り、我が國の人心が文明開化の末に馳せ歐米心醉に依つて全く混亂した時期に下賜せられ、民族の歴史と傳統に對する尊重の念を呼び醒し、世界史の奇蹟ともいはれるその後の日本の發展を支へたこの教育勅語は、大東亞戰爭の敗戦に伴ひ昭和二十三年六月十九日衆參兩院に於ける「排除」「失效確認」の決議に依つて學校教育から完全に締め出された。

(鳥巢)